児童期の両親への自己開示が青年期の友人関係に与える影響

池　田　真　理

1. 目的

大学生を対象として、児童期の両親への自己開示と現在大学生である青年期の友人関係との関連を検討する。

2. 方法

2009年11月中旬から12月下旬にかけて、大阪府内の某私立大学の大学生を対象に質問紙調査を実施した。児童期の自己開示の内容と程度を調べるために、鳥居・福本・中石（1995）が作成した自己開示性質問紙を使用し、「小学生の頃」と教示をして回想法での測定を行った。また、児童期の両親の養育態度を調べるために、小口（1991）が作成した「養育態度尺度」を使用し、こちらも「小学生の頃」と教示して項目も過去形に修正し、児童期についての母親と父親それぞれの養育態度について回想法で測定を行った。さらに、青年期の友人との関わり方の特徴を調べるために、岡田（1999）が作成した「友人関係尺度」を使用した。この項目は「今現在のあなた」として、回答してもらった。回答不備を除く259名（男子117名、女子142名）を有効資料として分析に使用した。

3. 結果と考察

自己開示尺度と養育態度尺度との相関を検討した結果、男女とも「過保護・期待」との因子間で正の相関がみられ、女子においては「拒否・厳格」との因子間で負の相関がみられた。久世・続・陰山（1972）の研究で、両親から愛情のある養育を受けていると認知する青年は、両親のみならず他の自己開示の対象に対しても、自己開示が高かったことを示しており、このことからも厳しく育てられるよりも、子どものことに関して何でもお世話をして育てられた方が愛情のある養育を受けていると感じ、自己開示が高くなると考えられる。次に、自己開示と友人関係尺度との相関を検討した結果、男子において、父親母親共に「自己開示」と「自己閉鎖」との因子間で負の相関がみられた。女子において、「母親への自己開示」と「自己閉鎖」との因子間で負の相関がみられた。このことから、小学生の時両親に自分のことを話していればいるほど、自分の内面を相手に見せないようにする傾向が低くなることを示している。また男子において、父親母親共に「自己開示」と「友だちへのやさしさ」との因子間で正の相関がみられた。女子において、父親母親共に、「自己開示」と「群れ」との因子間に有意水準は異なるが正の相関がみられた。これは渡辺・佐々木（1996）の研究の自己開示が高い子どもが友人関係の満足度が高いという、友人関係の満足度に関連してくるのではないかと考えられる。

以上のことから、子どもの頃に両親が保護的だったかや子どもを理解していたかによって子どもの自己開示に影響を与え、これは青年期に友人関係を築く時にまで影響すると言える。